

スリランカ国別評価＜概要＞

評価者

- ・評価主任
山口しのぶ
東京工業大学評議員・学術国際情報センター教授
- ・アドバイザー
アーナンダ・クマール
鈴鹿国際大学国際交流・地域連携センター長
- ・コンサルタント
グローバルリンクマネジメント株式会社

評価実施期間

2013年7月～2014年2月

現地調査国

スリランカ国



評価の背景・目的・対象

日本の ODA 政策の改善, 国民への説明責任, 対外広報のため, 2007 年度から 2012 年度までの日本の対スリランカ ODA 政策などに対する評価を行った。

評価結果のまとめ

日本の対スリランカ援助は, 開発の視点からは, 政策の妥当性は「高い」, 結果の有効性は「大きな効果があった」, プロセスの適切性は「適切に実施された」との評価となり, 総合的には「満足な結果」であった。また, 外交の視点からは, 対スリランカ援助は両国の外交関係に大きく資するものであった。

● 開発の視点

(1) 政策の妥当性

日本の対スリランカ援助政策と, 日本の上位援助政策, スリランカ国家開発計画, 国際的な優先課題との整合性は高い。他ドナーの援助政策とは, 連携体制が限定的な中, 支援内容や地域について仕分けがなされることで, 一定の相互補完性が達成された。

(2) 結果の有効性

総体的に大きな効果が確認された。重点分野のうち, 「戦後復興・生活改善」及び「経済基盤整備」では, 人間の安全保障への配慮や質の高い技術移転など, 日本の特徴をいかした有効的な援助が行われた。「貧困緩和・地域開発」では, 波及効果の高いモデル構築がなされた。「外貨獲得能力の向上」は, 開発課題の規模との比較で取り得る対応策は総体的に規模が小さく, インパクトが限定的にとどまらざるを得なかった。

(3) プロセスの適切性

策定及び実施プロセスは適切に実施された。ただし, 政策・予算の意思決定プロセスや評価

結果の公表のタイミングなどにおいて検討が必要な事例が存在した。

● 外交の視点

息の長い日本の対スリランカ援助は、スリランカと日本の友好関係に大きく貢献している。重要な海上交通路を保持するスリランカの持続的経済成長を後押しするため、投資環境整備などの支援を継続することは、日本の経済と安全保障の観点からも重要である。

主な提言

(1) 質を重視した援助の実施

スリランカにおける日本の援助の比較優位は、ソフトとハードを組み合わせた質の高い支援である。インフラ整備にも能力向上と技術移転を組み合わせ、スキーム間連携を活用することが、質を確保する上で有益である。また、質の高い技術を持ち合わせた日本企業との連携を通じた「オールジャパン」の仕組み作りが望まれる。

(2) 日本の技術と知見をいかした開発分野への支援の拡大

他ドナーに比べ日本の比較優位性の高い省エネルギー、再生可能エネルギー、防災における支援が期待される。また、産業育成に向けた高等教育と現地中小企業の育成も今後拡大すべき支援分野である。

(3) 南南協力の推進

開発指標の達成度が高いスリランカにおいて、他のアジア諸国やアフリカとの南南協力の促進が望まれる。日本の対スリランカ援助の好事例である保健医療分野や復興支援をこれらの国に発信することは、日本の支援に波及効果をもたらすほか、スリランカの対外関係における位置づけを高めることにつながる。

(4) 既存のドナー連携をいかした援助調整役の発揮

政府のオーナーシップが高く、ドナー主導の援助調整メカニズムが存在しないスリランカでは、既存の限定的な調整枠組みの中で、日本が引き続きドナーとスリランカ政府間の仲裁役や、スリランカ政府の行うドナー調整業務の補佐的役割を務めることが望まれる。

日本によって寄贈された新マナー橋の入り口に記念碑が設置されている。県の名前「マナー」に通じるとして、「愛(まな)の橋」という愛称がつけられた。

